

ひよくれんり 3

Chizuru & Masamune

なかゆんきなこ

Kinako Nakayun



エタニティ文庫

目次

ひよくれんり 3

奥様の弟 2

宗憲くんの話

書き下ろし番外編
甘い休日

333

303

271

5

ひよくれんり3

プロローグ 〈奥様の悩み〉

正宗さんと結婚してから……ううん、出会ってからずっと、胸に燻っている不安。私は、彼に相応しい人間なのかな……？

二人で街を歩いていると、たくさん女の人が正宗さんに熱い視線を向けている、なんてことがよくある。

うん、わかる。わかるよ。だって正宗さんは、とっても素敵な人だから。

そしてその視線が隣にいる私に移った時、決まって「どうしてこんな人と？」という顔をされる。

被害妄想？ ううん、事実だ。

誰だって、イケメンの隣に十人並みの女が歩いていたら『不相応』って思うもの。

二頭立ての馬車で、凛々しい白馬の隣によほよほのロバがいたら「あれ？」って思うでしょう？

ショーカーズの中で、お高い宝石の隣に石ころが並んでいたら「え？」って思うし、

薔薇の花と雑草が花瓶に一緒に活けられていたら「なんで？」って思うでしょう？

つまりはそういう意味なんですよ！ わかってる、わかってるよ！

誰よりも私が一番、「私なんかでいいのかな」って感じているんだから。

私、柏木千鶴と旦那様の柏木正宗さんは、去年の春にお見合いで出会った。

それから交際を始め、プロポーズされたのが八月。入籍したのは十一月のことだ。

現在私達は、正宗さんが亡きお祖父様から譲り受けた一戸建ての日本家屋で暮らしている。

縁側のある日本家屋で過ごしたい……が昔からの夢だった私には、まさに理想の環境です。畳、最高！

高校教師である正宗さんは、長身で、さらさらの黒髪で、眼鏡がよく似合う（ここ重要）イケメンだ。そして性格もとっても穏やかで優しい。

私なんかにはもったいないくらい素敵な人だ。いや、妻の欲目じゃないですよ！ 事実です。

そんな正宗さんとお見合いの末にスピード婚をした私は、友達からよく『柵から牡丹餅婚』と揶揄される。でも、腹は立たない。自分でもその通りだと思うから。

だってかつての私は三十路を前にして三次元の男の人と恋愛する気なんてさらさら起

さず、オタク街道まっしぐらな生活を送っていた。その上、仕事は本屋のパート。親のすねかじりなんて言われていたっけ。

ところがある日、突然お見合い話が舞い込んで……。そしたらなんと、ストライクど真ん中な外見の正宗さんがやってきたのだ。

正宗さんと出会えたことは、私の人生において最大の幸運だったと言っても過言ではない。

この人とならどんな困難も乗り越えていけるって確信したのは、結婚してからしばらく経った、妊娠騒動の時。生理がなくなった私は、もしかして妊娠？とパニックに陥った。結局妊娠はしていなかったんだけど、正宗さんは想像妊娠ならぬ、想像マタニティブルーになった私を全部受け止め、支えてくれた。

そして、私の腐った趣味のことを知っても気持ち悪がらず、受け入れてくれた。(実は私、オタクで腐女子なのです。男同士の恋愛が好物です！二次元はもとより、三次元でも男の人が二人で仲良さそうにしていようものなら、頭の中で、人には言えないようなあらぬ妄想を練り広げてしまふのです！) 知られたら、ドン引かれると思った。

最悪の場合、離婚されると思ってずっと隠していた。

腐バレした時のことを思い出すと、今でも血の気が引いたり、顔が真っ赤になったりしますが……

あの時正宗さんが言ってくれた言葉や、抱き締めてくれた腕を、私は一生忘れない。こうやって少しずつ互いのことを知って行って、夫婦の絆は深まっていくんだって。全部、正宗さんが教えてくれた。

料理を作れば「美味しいです」って言ってくれて、お仕事がとつても忙しい時にも、私を気遣ってくれる。休みの日にはいろんな所へ連れて行ってくれるし、その……夜も、私のことを求めてくれる。

腐女子の私が恋をして、男の人をこんなに愛しく思い(恥ずかしい!)、そして、愛される(恥ずかしい!)日が来るなんて、思いもしなかった。

こんなに素敵な旦那様と結婚できた幸運を、彼と一緒に暮らす日々の幸せを、私は噛み締めている。柵から落ちてきた牡丹餅を、けして落とさないように。

でも……

旦那様が素敵であればあるほど、不安は募るばかりなのです。

本当に、私なんかでいいのかなって。

チビだし、胸も……大きくない。顔だって十人並みだし、家事も独身時代に比べれば少しはマシになったけど、まだまだだ。

脳みそは相変わらず腐っていて、旦那様とご友人とで妄想しちゃうたりもする。こればかりは脊髄反射というか……、考えるより先に妄想しちゃうというか……。とにかく、やめられない。

性格だって、すぐ調子に乗るし、前向きすぎる一方で、落ち込みやすいし。すぐパニックになって暴走するし……って、自分の短所を挙げていたら、なんか泣けてきた……と、とにかく……！

私なんか、正宗さんの妻でいいのかなって、思わずにはいられないのです。え？ お前今更なに言ってるんだ、って？

前にも似たようなことで悩んでなかったか？ って？
うん。わかってる、わかってるよ……

でも、頭の中で整理はできていても、ふいに……そんな不安を感じてしまうんだ。だってこの幸せは、なんの努力もせず勝手に手に入れたものだから。

いつか呆気なく、失ってしまうんじゃないかって——
いつかこの手を離れて、もっと相応しい人のところへ行ってしまうんじゃないかって、そう、思わずにはいられないんだ。

指を絡めて、寄り添って

正宗さんと結婚して初めて迎えた夏は、本当にいろんなことがありました。

初挑戦した家庭菜園が豊作で、夏野菜料理のレパートリーも増えだし、海水浴をしに海にも行った。

それから、正宗さんに腐女子趣味がバレたのもこの夏でした。あの時は本当にパニックだったなあ……

そして、それ以外にもたくさん、夏の思い出があります。

あれは、七月の末のことでした。

目の前には、蒼い光を放つ大きな水槽が広がっている。

水の中を気持ち良さそうに泳ぐのは、多種多様な魚達だ。

そう、私と正宗さんは今、水族館で、デート中なのでありますっ！

水族館に行くきっかけになったのは、昨日見た夕方のニュース番組。ここの水族館を特集していて、ペンギンやイルカ、今年の春に生まれたというアザラシの赤ちゃんがあ

んまり可愛いから、ついついテレビの前で、「ほあああ！ か、可愛いー！」と騒いしまった。

すると、正宗さんが「見に行きましようか？」って言って下さったのです。

水族館は昨日のニュースの効果もあってか、大混雑。入場するだけでも結構時間がかかった。

でも、並んだ甲斐はあった！ ペンギンも、アザラシの赤ちゃんも、とつても可愛かったよ！！

（はあー。やっぱり良いなあ、水族館）

水族館、大好きなんですよー！ はしやぎすぎてすみません！

水槽の中を自由に泳ぐ魚達をじっと見ていると、自分も一緒に泳いでいるような気分になってくる。

魚達、気持ち良さそうに泳いでるなー。

「あつ、正宗さん。あれイワシですって」

私はプレートの説明文を見て、今日の前で泳いでいる魚の群れがイワシであることを知る。イワシかあ……

スーパールの鮮魚コーナーで見るイワシと、こうして群れになって悠々と泳いでいるイワシの姿がなかなか重ならなくて、なんだか変な感じ。

でも、そうだよ。食卓に上る魚も、元はこんな風に海を泳いでいたんだよ。

うーん。それにしても……

光を反射してキラキラと輝く、ぶりぶりとしたお魚。なんて綺麗で、そして……

「……美味しそう……」

「……っ」

はっ！ つ、ついつい本音が……っ。

隣を見ると、正宗さんが口元を押さえて肩を震わせている。

わ、笑っていらつしやるよおおお！ 我ながら、なんてアホなことを言ったんだろう！ もう！ どんだけ食欲旺盛なの！ 自分！！

い、今の発言取り消したい！ リセット！！ セーブポイントからロードし直して、違う台詞を選択したい！！

「このレストランで魚料理、食べられると思いますよ」

「……ふあい」

現実に、セーブ&ロード機能はない。

知ってても、探してしまう、ゲーム脳……（あ、一句できた）

この水族館は海に面していることもあって、館内のレストランでは新鮮なお刺身が食

べられました。

お魚を見て、お魚を食べる。ちょっとシユールだけど、海の幸は大変美味しゅうございましたっ!!

やっぱりお魚は、新鮮なのが一番だよー!

でも「うまうまあー」って上機嫌に食べていたら、正宗さんが食事中のハムスターを見るような、微笑まじげな顔で私を見ていて、複雑な心境です。

それはさておき。美味しいお魚に舌鼓を打ち、ソフトクリームなんかもいただきたいちゃって、お腹を満たしたあとは鑑賞再開だ。

ちようど今、お客さんで賑わっている目の前の水槽には、この水族館の人気者の一人、ラッコの源さんがいる。(名前洪すぎでしょ! でも、そこがまた可愛い!)

ラッコ。可愛いよねラッコ……!!

どうやら、ちようど餌やりタイムらしい。だからこんなに人が集まってるんだなあ。

ラッコの食事シーンというと、やっぱりあれだよ。お腹の上でこう……、カカカツ! と貝を割って食べるやつ。

一生懸命で可愛いんだろなあ。

私はわくわくと、期待に胸を躍らせてその時を待った。

……の、ですが。

「えっ!」

ラッコの源さんは、係のお姉さんから渡された貝を受け取ると、ちゃぽんと水の中に潜り……

ガンガンガン!! と、まるでヘビメタバンドのドラマーのように、それを床に激しく叩きつけ始めたのです。

え、ええええ!!

ラッコって、貝をお腹の上に載せて、石で割るんじゃないのおおお!!

た、確かに、そんなまどろっこしいことをするより、床に叩きつけた方が早いのかもしれませんが、様式美……というものがですね。

呆然とする私を尻目に、源さんは貝をちゅるりと食べて、係のお姉さんに二つ目をねだっている。

げ、源さああああああああんっ!! おかわりを要求している場合じゃないよ!!

お前は今、ここに集う子ども達の夢をだな(そして大人の夢もだな)、奪ったのだよ!!

ラッコはお腹で貝を割る、と思っていたのに! 楽しみにしていたのに!!

「……くっ。ラッコの世界にも、合理化の波が……」

「っ!」

思わずぼつりと眩いたら、隣の正宗さんがまたも口元を押さえて肩を震わせていた。

ちよつと臍ふに落ちないラッコの食事シーンを見たあと、私達はイルカのショーが行われるという館内アナウンスを聞いて、屋外のプールに向かった。

「楽しみですねえ、正宗さん」

「はい」

残念ながら後ろの方の席しか空いていなかったんだけど、それでもわくわくしながら座って待つ。

私はイルカの姿を写真に収めようと、鞆からスマートフォンを取り出してカメラ機能を立ち上げた。うん、準備はつちり！

そして大きな拍手と共にイルカのショーが始まった。係のお姉さん達がイルカの名前を高らかに呼ぶと、それに応えるようにイルカが大きくジャンプする！

「わあ！」

すごいなあ、イルカ。あんなに高く飛べるんだ！

水しぶきを上げながら、宙ちゆうに舞う艶つややかな身体！ きれーい！！

思わず見入ってしまった、シャッターチャンス逃してしまふ。さらにイルカ達のショーは続き、写真を撮る暇なんてなかった。

ええい！ こうなったらスマホの画面越しに見るより、この目にしっかりと焼き付けよう！

「すごいすごい！ すごいですねえ、正宗さん！」

興奮した私は、そう隣の正宗さんに話しかけた。

「はい。すごいですね」

正宗さんは微笑みを浮かべて頷うなずいてくれる。

「……っ」

その微笑に、胸がトクン……と高鳴った。

な、なんだろうこれ……。結婚してしばらく経たつのに、気持ちはお会って間もない頃と変わらず、正宗さんの些さ細こな仕草さまにいちいちときめいてしまふ。

私は今も、旦那様に恋してるみたい。

……って、な、なんか照れるな……

でもそれは、疑いようのない真実だった。

ショーはあつという間に終わってしまった、人々の流れに乗って館内に戻る。

もう全部のエリアを見て回ったから、あとはショップに寄って帰るのみだ。

それにしても……

(うう……、人でいっぱい……)
イルカショーを見ていた人達がそのまま館内に流れてきたから、すごく混んでいる。まるで通勤ラッシュ時の満員電車のように。最初に中を見て回っておいでよかった。こんな状況じゃ、人波に逆らうことなんてできないもんなあ。

正宗さんの姿を見失わないように、必死に歩いていたら……

「？」

手に、温かいものが触れた。

斜め前を歩く正宗さんを見ると、こちらを振り返って微笑んでいる。

私のはぐれてしまわないように、手を繋いでくれたんだ。

「……………」

もう夫婦なのに……

とつくに一線越えてんだろって、思われるかもしれないけど。

ぎゅっと繋いでくれる手が嬉しくて、私はなんだかくすぐったいような、温かいような気持ちになる。

赤くなってしまった頬を隠すように俯くと、正宗さんが指をするり、と私の手に絡めてきた。

「あっ」

お互いの指と指がしっかりと絡まっている。

これは……いわゆる、こ、恋人繋ぎってやつだ!!

正宗さんの体温がよりいっそう伝わってきて、心臓がバクバクする！
ど、どうしよう……!!

「……大丈夫ですか？ 千鶴さん」

「……はっ、はひっ……」

動揺のあまり、声が上擦ってしまった！ は、恥ずかしい!!

私達はしっかりと手を繋いだまま、人混みを抜けてようやくショップに辿り着く。
(わあ、色々あるなあ……)

実家やご近所にもお土産を買って帰ろう。

お土産にちょうどいいお菓子を選び、次に向かったのは、赤ちゃんアザラシのぬいぐるみが並べられている棚の前。実際に見たアザラシの赤ちゃんは、白い産毛が抜け落ちちゃってただけど、ぬいぐるみは真っ白もふもふでとっても可愛い!!

あの白くて柔らかい毛に顔を埋めて、もふもふしたい！ もふもふ!

赤ちゃんアザラシのぬいぐるみには大・中・小とサイズがあった。

うーん、お手頃なのはやっぱり小サイズだけど、ちょっと物足りないなあ……。抱き

締めるには小さいし、かといってストラップとして使うには大きすぎる。ここは中サイズにしておく？ でも、大サイズも魅力的……っ。ただお値段がなあ……うーん……

「……可愛いですね」
 どうしよう、どうしようと悩んでいたら、隣の正宗さんがぼつりと呟いた。

「っ！」
 そうでしょう！ この可愛らしさ！ もはや犯罪レベルですよね！！

正宗さんの同意を得られたのが嬉しくて、俄然^{がぜん}テンションが上がってしまった。思わず、繋いだ手をぶんぶんと振ってしまふ。

「ですよね！ 赤ちゃんアザラシって、なんでこんなに可愛いんでしょうね！」

こうなったらもう、奮発^{ふんぱつ}して一番デッカイの買いますか！

可愛いのは正義ですよ！！

「ああ……。いえ、そうではなくて」

「え？」

そうではない？

「千鶴さんが、可愛いなあ……と」

え……。あ……。え？

ええええええええ！！

「かつ、かわっ!!」

「はい」

正宗さんは頷^{うなず}いて、微笑む。

ちよ、だめええええ!!

その顔は、だめえええええ!! 目がっ、目がああ!!

正宗さんの優しく美しい微笑に、本当に目が潰^{つぶ}れるかと思いました……

その日の夜、今日買った赤ちゃんアザラシのぬいぐるみ（大）を抱いて、私は一人ベッドの上で寝転がっていた。（正宗さんは現在お風呂です）

そして、もふっ、もふっと、思う存分ぬいぐるみを撫^なでる。

なんだこの気持ち良さ！ たまらん!!

抱き枕にちょうどいいサイズだし、普通の枕としても使えそう……

可愛いだけじゃなく実用性もあるなんて、いい買い物したなあ！

「ふあ……」

ふわっふわのぬいぐるみを愛^めでているうちに、だんだん眠くなってきた。

すっごく楽しかったけど、人混みで疲れてしまったのだろう。帰りの電車も満員だったし。

(ん……でも、正宗さんがまだ……)
 正宗さんがお風呂から上がってくるまで待っていようと思ったのに、結局私は睡魔に負け、ぬいぐるみを抱いたまま寝入ってしまった。

* * *

「ふう……」

熱いシャワーを浴びたあと、俺は濡れた髪をバスタオルで拭きながら二階に上がった。夏はシャワーだけで済ませることが多い。それでも湯上がりは暑くて、つつい浴衣の襟元えりもとをくつろげてしまう。

そして寝室に入ると、先に風呂を済ませていた千鶴さんがベッドの上で丸くなっていた。

彼女は薄手の夏用布団の上に寝転がっている。その腕の中には、今日買ったばかりのアザラシのぬいぐるみが。

「……………」

俺は思わず口元を押さえる。ぬいぐるみを抱いて、くうくうと無邪気に寝息を立てる千鶴さんが、あまりにも可愛らしくて……

おまけにワンピースタイプの寝巻すそめくの裾が捲めくれて、白い太ももが大胆に露出している。

なんだろう……。理性を試されている気分だ。

「……千鶴さん？」

小さく、彼女の肩をゆすって声をかけてみる。このまま寝かしてやりたい気もするが、きちんと布団の中に入った方がいい。

「ん……………」

千鶴さんはゆっくりと目を開けた。

「……………」

が、すぐに目を瞑つむると、相好そうごうを崩してぬいぐるみをさらにぎゅうつと抱き締める。

「……………」

その無防備な笑顔に、俺の理性は音を立って崩れていった。

「千鶴さん」

こんな風に煽あほる、あなたがいけないんですよ……？

俺は彼女の腕の中からぬいぐるみを奪い取った。そしてアザラシに「ごめんな」と小さく呟つぶいて、ぼいと床に放り投げる。

「んん？」

それまで腕の中にあった物がなくなっただけで違和感を覚えたのか、千鶴さんが身動きみじょうする。

俺は眼鏡を外してヘッドボードに置くと、彼女の身体の上に覆い被さって、わずかに開いている唇に自分の口を重ねた。

「ん……………んんっ……………」

唇の隙間から温かい口内に舌をねじ込む。彼女の口の中は、ほのかにミントの味がした。同じ歯磨き粉を使っている俺の口の中も、同じ味がするのだろうか。

「ふあ……………っ。ん……………あ……………っ」

「はあ……………っ。千鶴さん……………」

「……………え……………。正宗……………さん……………?」

目を覚ました千鶴さんが目を丸くしている。

俺を見上げるその瞳はすでに潤み、頬はうっすらと上気していた。

彼女の髪を耳にかけてやると、俺はそっと囁いた。

「……………起こしてしまつて、すみません。でも、どうにも……………」

あなたがあまりにも可愛らしくて、我慢できませんでした。

そう告げると、彼女はかああつと頬を赤らめる。ああ、そんな初心なところも可愛いです。

「そつ、そんな……………ことは……………ない……………かと」

「そんなこと、ありますよ。ほら」

俺はぐっと、彼女の太ももに腰を当てる。

「あつ」

硬いモノの感触に俺の欲情を察したのか、彼女は小さく声を上げた。

「……………ね?」

あなたが可愛いから、俺のココはこんなになつてしまつたんです。

「……………っ」

千鶴さんが恥ずかしそうに目を逸らす。そんな仕草すら愛しくて、俺は再び彼女に口付けた。

「んっ」

千鶴さんも拒まずに舌を絡めてくる。結婚したばかりの頃は、キスをするのも戸惑っていたが、この頃は自然に受け入れてくれるようになった。それが嬉しい。

「あ……………っん……………っ。んんう……………」

「……………っ、あ……………」

名残惜しくも唇を離すと、二人の間を銀糸が伝った。

身を離し、彼女の寝巻を脱がせる。千鶴さんは寝る時はブラジャーをつけない。だからキャミソールと下着を脱がせば、あつという間に華奢な裸体が露わになる。日に焼けて、水着の跡がうっすらと残った肌。俺は思わずこくりと喉を鳴らした。

そして自分も、浴衣と下着を脱ぎ捨てる。邪魔な薄手の布団もベッドの下に落とした。「正宗さん……」

裸になった俺に、千鶴さんが手を伸ばしてきた。その手をとって、指先に口付ける。

「あっ」

指先も感じるらしい彼女の指を口に含んで舐める。

何故か、彼女の身体は隅々まで甘く感じられる。

「んっ……あっ……」

口から千鶴さんの指を外したあとは、本能のままに彼女の胸に唇を寄せる。

ふわりと柔らかくて、ちょうど俺の手に収まる彼女の胸を揉みながら、頂を口に含んだ。

「あッ……」

ぷくりと勃ち上がった頂を、ころころと鉛玉のように転がす。その度に、千鶴さんの身体がびくびくつと震えた。

そして彼女の秘所にそつと右手を這わせれば、ソコはもうしつとりと濡れている。

くちゅり……と水音を立てて指をナカに挿し込むと、ねつとりとした花びらが俺の指を包み込んだ。

「……んっ、んっ……」

胸の頂を食んで、軽く引つ張る。時には歯を立てて、時には優しく舌でこね上げるように。

そうして胸を愛撫しながら秘所を指で攻めると、徐々に水音が大きくなっていった。それだけ滴が溢れて、俺の指に絡まっているのだろう。

ナカを攻める指を二本、三本と増やす。

「……やっ……あっ……」

千鶴さんは目をぎゅつと瞑って、いやいやと首を振った。

だがそんな仕事とは裏腹に、熱を帯びた彼女の肌は女性特有の色香を放ち、俺を誘っている。

しとどに濡れる蜜壺も、トロトロにとろけていた。

……そろそろかなと、俺はさらに指の抜き挿しを激しくする。

「や……あ……っ……やああっ！」

ぐちゅぐちゅつと泡立てるように指で攻めれば、千鶴さんはびくんっ！と背を反らして絶頂を迎えた。

彼女はそのまま、はあはあと荒い息を吐いて、ぐつたりとベッドの上に倒れ込む。

俺はうつすらと汗ばむ千鶴さんの額に口付けてから自身を掴むと、果てたばかりの彼女の秘所に宛がった。

「んっ」

千鶴さんはわずかに声を上げ、身を震わせる。俺はすぐには彼女のナカに入らず、トロトロと濡れそぼった割れ目に自身を擦りつけた。

「あ……っ、ああっ……」

果てたばかりの身体には、そんな動作さえ刺激になるらしい。

千鶴さんの口からまた、吐息と共に甘い嬌声が零れる。

まだ完全に勃起上がったとはいえない自身をそうやって擦りつけることで、俺も快感を得る。

潤んだ瞳の千鶴さんが、「まだ……?」と乞うような視線で俺を見上げてくるのがたまらなかった。

焦らすようにゆっくりと腰を振り、彼女の胸をやわやわと揉む。

「んっ……あっ……」

きゅつと目を瞑り、快感を堪えるようにしている彼女は、いつまで経っても初々しくて、可愛い。

「……挿れ、ますよ……」

そう言うと、千鶴さんはこく……と頷いた。

「あ……っ」

腰を進め、奥まで収まった俺の肉棒を、千鶴さんの花びらが熱く締めつけてくる。

何度も交わっているうちに、彼女の身体が俺の身体にぴったり馴染んできたような気がする。……男冥利に尽きるな。

「んっ……」

焦らすようにゆっくりと抽送を繰り返す。あまり激しくはない動きに、千鶴さんは甘い吐息を吐いた。

「んっ……は……あ……っ」

その声が、俺の心を快楽に染めていく。

こうして彼女と一つになれることが嬉しくてたまらない。

そして欲求のままに、彼女の太ももを掴み、激しく腰を打ちつける。

「ひゃっ、あっ。ああっ……」

ぱちぱちっと、汗ばんだ肌と肌がぶつかり合う。

「千鶴さん……っ、千鶴さん……っ」

「うあ……っ……正宗……さあん……っ」

涙を流しながら、彼女は俺に向けて手を伸ばしてきた。太ももから手を離し、彼女の手をとる。

そして今日、水族館で指と指とを絡め合った時のようにぎゅつと手を繋いだ。

「あっ……正宗さ……っ……正宗さあっ……ん」
 「くっ……」

俺は千鶴さんと繋がり合ったまま、彼女の奥深くに白濁を吐き出した。

* * *

(ふ、ふおおお……)

現在、時刻は深夜一時。

わ、私は赤ちゃんアザラシのぬいぐるみを腕に、ま、まさ……正宗さんの胸の中ですっぽりと、抱かれております……！

え、ええと、ですね。あの、正宗さんと致しましたあと……

二人でもう一度シャワーを浴びて、寝巻に着替えて、床に転がっていたぬいぐるみを抱き枕として使おうと、腕に抱いて布団に入りましたらば……

正宗さんが無言で私の身体を抱き寄せて、ぎゅって……したのです。

『ま、正宗さん……？』

あ、暑くないですか？ まだまだ季節は夏ですよ？

そう疑問に思う私に、正宗さんはふわりと微笑んで、「俺も抱き枕が欲しいです」って、

仰おつしやって……ですね。

結果、向かい合う形で間にぬいぐるみを挟み、抱き合って眠ることに。

(だ、抱き枕って私か!?)

正宗さんは今、すうすうと寝息を立てておられます。気持ち良さそうです。でも……

(私はドキドキして、眠れないよおおおお!)

……とか言っていました、その数分後にはうつらうつらと舟を漕ぎ始め……

結局、爆睡……してしまいましたあ！

うう……。おまけに朝起きてみたら、ぬいぐるみによだれが……っ！

思わず絶叫しそうになりましたよ。

正宗さんによだれを垂らした間拔けな寝顔を見られたのかと思うと、恥ずかしくって……！ それにぬいぐるみ！ 買ったばかりなのに即洗濯とか！ ごめんよラッシーイー!! (アザラシなので、ラッシー。今決めた)

お前があんまりふわふわで、気持ち良いからさあああああ！ ついつい、よだれがつ！

恥ずかしいやら、申し訳ないやら。泣く泣く手洗いたあと、お日様の光をたつぷり浴びて再びふっかふかになったラッシーは、この日から私の昼寝のお供として大活躍す

るのでした。

だって、ふわっふわのラッシーを抱き締めていると、気持ち良く眠れるんですもん！
そしてその魅力にとりつかれたのは、どうやら私だけではないようで……

「……すう、すう」

正宗さんがラッシーを抱いてお昼寝している姿を目撃し、「ッッ。た、たまらん!!」と、
激しく身悶みだえする私なのでした。

バーベキューと空の星

夏だということ忘れてしまいそうなほど涼しい風が、林の中を爽さわやかに吹き抜けて
いく。

八月になって間もないある日のこと。私は正宗さんと、正宗さんの職場の同僚でご友
人でもある幸村真ゆきむらまことさん、幸村先生の恋人の水無月朧みなつきろうさんと四人で高原に遊びに来ていた。
正宗さんと幸村先生は中学時代からの友人で、幸村先生は昔から正宗さんの家に泊ま
りに来ていたらしい。むふふ、なんと、うちには幸村先生のお泊り用の浴衣があるので
すよ！二人の学生時代を想像しただけで、ご飯三杯はいけます！

ちなみに幸村先生は、正宗さんと同じ高校の養護教諭をされている。明るく、人懐なつつ
こい性格から、生徒さんにとっても慕したわれているんだとか。

そんな幸村先生の恋人は、女性ではなく男性です。ええ。腐女子の私には幸せこの上
ない環境です。身近に素敵なBLカップルがいるんですから！

水無月朧さんは、美大で日本画を学ぶ大学院生。ハッと目を惹ひくような中性的な美貌
の持ち主で、ご実家は高級料亭を経営されている。私が初めて幸村先生を紹介してもらっ

たのも、隼さんの家の料亭だった。ちなみに幸村先生と隼さんは遠い親戚らしい。お二人の馴れ初めとか、いつかじっくり聞いてみたいなあ。

お二人はよく家にごはんを食べに来たり、お酒を飲みに来たりして、先月は四人で海にも行ったのですよ。

そして今回も、こうして四人で遊びに来ました！

ここは日本で最も有名な、白樺しろがほの林に囲まれた別荘地です。

そうですね！ 軽井沢です！！

綺麗なお嬢様が白いワンピースを着て「うふふ」と優雅にお散歩していそうなイメー
ジの（え？ 考えが古い？）、あの軽井沢ですよ！

いやあ……、最初に幸村先生からお誘いを受けた時はびっくりしました。

『ちーちゃん。来週予定空いてる？ 暇ならさ、一緒に別荘に遊びに行かない？』

って、軽く言うんだもん。思わず「ホワッツ!」って口に出しちゃった。

別荘に遊びに行くとか、どこのセレブですか!? って思いましたよ。

それで最初は、水無月家は料亭以外にも飲食店を営んでいるらしいし、隼さんのおうちの別荘かな。もしくは、貸し別荘？ と思ったのですが……

『今年はおうちの家族、誰も使わないって言うからさー。何もない所だけど、涼しいよ?』
『えっ!』

まさかの……！ 幸村先生のおうちの別荘でした!!

隼さん曰く、「真の家は、うちより金持ってんぞ」だそうです。

セレブの親戚はセレブなんですな！ イケメンの親友がイケメンなのと同じですかね！（違）

……とまあ、びっくりなお誘いではありましたが、お言葉に甘えて遊びに来ました。人生初の軽井沢！ そして人生初の、別荘にお泊りです！

幸村先生の愛車で、夏休みで混み合う道路をのんびり走り、本日の宿泊先たむに辿り着いた。
「わあ……」

幸村先生のおうちの別荘、すっごく素敵です……！

一階部分はオレンジ色の煉瓦煉瓦造り。そして二階部分は深みのあるブラウンの木材が板張りされている。屋根の出窓も可愛い！

外観だけじゃなくて、内装もとっても素敵だった。真っ白い壁のリビングは吹き抜けで、すごく広い。システムキッチンもシンプルで使いやすそう！ 家具はほとんどイタリア製なんですって！ セ、セレブ……！

私は口をあぐりと開けっぱなしでした。

こんな所に泊まれるなんて、ゆ、夢のよう……！

「正宗、いつもの部屋でいいよね?」

「ああ」

(!?)

きゃー！ なにその親密な会話！

幸村先生と正宗さんの親しげな会話に、私の耳がぴくり！ と反応する。

正宗さんや隼さんがこの別荘に泊まったことがあるってのは聞いていたけど、「いつもの部屋」って言い方が、なんか萌える！

……と一人でニヨニヨしていたら、隼さんが小馬鹿にしたような顔でこちらを見ていた。

うっ！ 実は隼さんには、一番最初に私が腐女子だつてことを見破られたんだよね。

その後予期せぬ形で正宗さんにもバレ、一悶着あり……

ええ、あの時は本当に、隼さんにご迷惑をおかけしました、すみません！

きつと今も、私が正宗さんと幸村先生に萌えてることがバレバレなんだろうなあ……
いかんいかん。正宗さんには腐女子つてことはバレたけど、正宗さんと幸村先生であらぬ妄想をして萌えている、ということは知られていないのです。というか、知られてはいけません！

緩んでいた顔を、キリツとさせる。

けれど引き締めた顔は、次に案内されたゲストルームで「きゃあー！」という歓声と

共にたるんでしまった。

「か、可愛い……！」

白で統一されていた一階とは違い、ゲストルームはそれぞれ趣の異なる内装らしい。私と正宗さんが泊まる部屋の壁は、落ち着いた深い青色に塗られていた。天井とカーテンは白。家具は全てナチュラルな木製。どうやらこの部屋は北欧風に纏められているようだった。

落ち着く日本家屋も好きだけど、素敵な洋風のお部屋にもときめく……！

一階にあるジャグジー付きの大きなお風呂とは別に、各部屋にも小さなシャワールームが付いているらしい。そう正宗さんから聞いた私は、さっそくシャワールームの扉を開けた。(ホテルでも、真っ先に浴室の扉を開けたがるタイプです)

わわ……！ 洋画に出てくるシャワールームみたい！ お、お洒落！

私は「可愛い！」「素敵！」と連呼しながら、部屋の中をうろろろと見て回った。正宗さんがはしゃいでいる私をにこにこで見ていることに気付き、はつと我に返るまで。

そんなこんなで大興奮の一日目の夜は、煉瓦造りの広いテラスに出てバーベキューをする事になった。

別荘の管理人の方が、すでにバーベキューセット一式と材料を用意して下さっていた

のです。しかも冷えたビールに、スイカまで！

なんだか至れり尽くせりで申し訳ない。せめて焼くくらいは……と、私はトング片手に腕まくり。

け、けして自分が一番最初に食べたいからとかじゃないですよ！ 今日の私は、皆さんに美味しいお肉と野菜をお届けするバーベキュー奉行なのです！

ちなみに家庭用バーベキューコンロの炭火は、正宗さんと幸村先生が点けてくれた。なんか、わくわくしますね……！

ステンレスの網の上に、食材をどんどん載せていく。

結構大きなコンロだからなあ、いっぱい載せられるなあ。

ほどなく、お肉がジュージューと焼ける音がして、良い香りが辺り一面に広がる。

薄く切られたお肉は、油断するとすぐ焦げちゃうからね。気を付けないと。

「お肉焼けましたよー。どんどん食べて下さいね！」

香ばしく焼けたお肉をひよいひよいと、幸村先生のお皿へ。

あ、タレはお好みでどうぞ！

「ありがとうございます！」

あつ、正宗さんが食べたがっていた牛タンも、イイ感じに焼けてますねー！

牛タンはやっぱり、レモンですよね。

「ハイ！ 正宗さん召し上がれー」

「ありがとうございます」

えへ……。なんか照れるけど、嬉しいなあ。

正宗さんは私が何か料理を盛ったお皿を渡す度に、いつもこうしてお礼を言ってくれるのだ。

食べる前はちゃんと手を合わせて「いただきます」。食べたあとも「ごちそうさまでした」って言ってくれる。そんな正宗さんが、私は……だ、大好き……だ。

……って！ ついつい惚気てしまった。

わ、私も牛タン食べよう！

……ん、んんー！ 美味しいー!! この独特の食感がたまりませんなー！

それにこの新鮮な空気の中で食べると、お肉も野菜も、いつも以上に美味しく感じられるなあー。

よーし！ この調子でどんどん焼きましょう！

網の上には、牛カルビに牛ロース、サーロイン。それから牛タン、豚トロ。

脂が滴り落ちて、うーん、良い匂い！ お肉の焼ける匂いって、どうしてこんなに食欲をそそるんだろうなー。たまらん！

あ、鶏肉もあるから焼こう！ 他にも、鶏のナンコツやハーブ入りのソーセージまで

ある！

それから野菜もたっぷり！ 輪切りにしたトウモロコシ、ピーマンにニンジン。シシトウにエリンギに、シイタケ。プチトマトも！

プチトマトは生で食べるのもいいけど、軽く火で炙^{あぶ}って食べると美味^{おい}しいんだよね〜！

あつあつのところをはふはふと食べる焼きトマト、美味です！

おっと、タマネギがイイ感じに焼けている。焦^やげる前に食べないと！

んん〜！ 焼きタマネギも甘くて美味しい〜！！

「隼^{はやぶさ}さん、お肉のおかわりいかがですか？」

食べ頃なお肉を、お皿の空^あいている隼^{はやぶさ}さんにすすめる。

「……まだ赤い。もつと焼け」

はーい。隼^{はやぶさ}さんはウエルダン派のようです。

じゃあ野菜食べて下さいねーと言って、私は焼けた野菜を物色する。あ、あのシシトウとか食べ頃だ。

「シシトウ、美味しそうですよ」

「ん。もらう」

そんな風に、ひよいひよいと網の上でお肉や野菜を焼いては、皆^{みな}さんのお皿に盛^のって

いく。

正宗^{ただむね}さんや幸村^{ゆきむら}先生^{せんせい}が「代^かわろうか？」と仰^{おん}って下さるけど、いえいえここは、この奉^{ほう}行^{ぎょう}めにお任せを〜！ なんてね。お二人はゆっくり召^{めい}し上が^あって下さい。

あ、そうだ海鮮^{かいせん}もあったんだ！ イカ、エビ、それにホタテ！！

空^{から}いたスペースに、海鮮^{かいせん}をどんどん載^のせていく。

うふふ！ 殻^{から}付きのホタテがばかつと開^あいたら、バターを載^のせて、お醤油^{しょうゆ}をたら〜り……

「……………」

ここが重要^{じゅうよう}なものです。多^{おほ}すぎても少^{すく}すぎてもいけないのです！

「……………」

いやー！ 美味^{うまい}しそーい！！

お醤油^{しょうゆ}とバター、そしてホタテの旨^{うま}味が混^まざり合^あって、えもいわれぬ良い香り！ たまらん！！ 早く食^たべたーい！！

おっと、その隣^{となり}では鶏^{とり}肉^{にく}がイイ感じに焼^やけている！

そして正宗^{ただむね}さんのお皿^{しら}が空^{から}いている！

私はトングで鶏^{とり}肉^{にく}を掴^{つか}むと、正宗^{ただむね}さんのお皿^{しら}にひよいと載^のせた。

「ありがとうございます。千鶴^{ちずく}さんも食^たべて下さいね」

はい！ 皆さんのお皿に載せつつ、しつかり自分も食べますよ。

おっと、そろそろ良さそうですね、ホタテ。

私は自分のお皿にホタテを載せ、割り箸でつまんでふーふーと息を吹きかける。

「んんー！ うまあー！」

感動的な美味しさです！

醤油とバターの絶妙な組み合わせが……神や！

「千鶴、俺もホタテ食べたい」

「はい。熱いので、気を付けて下さいね」

隼さんのお皿にホタテを一つ載せる。

「ん。……美味しい」

ねー！ 海に行った時に食べた魚介も美味しかったけど、高原でバーベキューするのも、また違った美味しさがありますよね！

「……これも食べろ」

正宗さんが、網の上のピーマンを隼さんのお皿に載せる。

あれ？ 隼さんってピーマン好きだったっけ？

「っ!? てつめえ正宗！ いらねーもん載せんじゃねーよ!!」

ああ、やつぱり。家でピーマン料理を出した時も、いらないうって言って幸村先生に食

べさせてたもんなあ。(そして、私はそれを見てニヨニヨしておりました！)

「野菜も食え」

「食ってんだろーが！ シシトウとか」

シシトウとか、シシトウとか……ですね。

そういうえば隼さん、シシトウ以外のお野菜は一切口にしていないな。

「大体、バーベキューは肉を食ってなんぼだろーが！ 野菜なんておまけみたいなもんだろ！ それに俺は野菜が食えないわけじゃない。焼いただけの野菜が好きじゃないだけだ！」

どうやら隼さんは、バーベキューの野菜が苦手なようです。(シシトウは例外)

「屁理屈を言うな。いいから、ほら。タマネギも甘いから、食ってみろ」

嫌がる隼さんに、正宗さんは野菜を食べさせようとする。

ちよ……！ なにこの父と息子みたいな美味しい光景!!

正宗さんは左手でがっしりと隼さんの肩を掴み、箸でつまんだタマネギを隼さんの口に持っていく。

一方、隼さんは必死で正宗さんの右手を押し戻そうとする。

……箸がなければ、正宗さんが隼さんを押し倒そうとしているように見えるな。ふふつ。

「まあまあ、正宗落ち着いて。隼、食べられるだけいいよ。あとは俺が食べるから」

幸村先生……！ お母さんみたい……！

「お前がそうやって甘やかすから……」

「るせー。人の嗜好に口出すな」

「麗だって普段は食べられるんだよ。ね？」

あああ、まるで子どもの教育方針で揉める夫婦のよう！

美形三人のやりとりに、私は一人、心の中で悶えておりました！！

「バーベキュー、楽しいですねえ！」

本当に！ いろんな意味で楽しいです……！！

「喜んでもらえてよかったー」

グラスビールを片手に、幸村先生がにっこりと笑う。その頬はすでに赤らんでいた。

炭火で焼いたお肉や野菜、海鮮を肴に男性陣は冷えたビールをグビッと。

私はビールが苦手なので、梅酒のソーダ割りをグビッと。

（ああ……幸せ……）

「美味しー！」

コンロの火は熱いけど、汗をかきながら美味しいものを食べて飲む！ っつのが、た

まりませんなあー！

最後に冷えたスイカを食べて夕食を終えたあとは、お風呂をいただいて早めにベッドに入りました。

明日は四人でアウトレットに行くのです。だから早く寝なきゃいけないんだけど……

（……眠れない……）

興奮冷めやらず……眠れません！

ふかふかのベッドの上でごろんと寝返りを打つ。

私達のお部屋はツインの客室なので、正宗さんとは別々のベッドだ。

いつもすぐ傍にある温もりがないから、余計に落ち着かないのかな？ ……はっ、自分

分はなんて恥ずかしいことを考えてるんだ……！ と赤面してしまう。

……でも、やつぱり寂しい……かも。

正宗さんに「一緒に寝て下さい」って、言う？

い、いやいやいやいや！ そんな甘えたこと言えない……！

「……千鶴さん。もしかして眠れないんですか……？」

隣のベッドにいる正宗さんが、声をかけてくる。

ちようど正宗さんのことを考えていたから、びっくりしてしまった。

「は、はい……！」

眠らなくちゃと思うんだけど、眠ろうと意識するほどに目が冴えてくるんだ。

(どうしよう……)

「それじゃあ、少し散歩に行きませんか？」

「え……？」

お散歩……ですか？ 今から？

「俺も眠れないんです。よければ、一緒に」

「はい……！」

私は頷いて、布団からがばっと起き上がった。

正宗さんと夜のお散歩なんて、なんかドキドキする！ 楽しみ！

高原の夜は冷えるから、私達は寝巻の上に薄手の上着を羽織って外に出た。

ちなみに本日の正宗さんの寝巻は、上下紺色のパジャマ。普段浴衣で寝ている正宗さんのパジャマ姿はレアだ。

「わあ……！」

外に出た私は夜空を見上げ、感嘆かんたんの声を上げた。

夜なのに、空が明るい……！

私達が住んでいる街よりも、ずっとずっと夜空が高く見える。

そして、満天の星!! 綺麗……

「今日は星がよく見えますね」

正宗さん曰く、今夜みたいに月が見えない夜の方が、星が綺麗に見えるんだって。月が明るいと、星の光が霞かすみんでしまうから。

「へえー」

綺麗な星空に感動しながら、私は正宗さんに手を引かれ、夜の高原を歩く。

坂を少し上った先に、見晴らし台があるらしい。

そこを目指して、ゆっくりと夜の散歩を楽しむ。

星明かりのおかげで、夜道は思ったよりも暗くない。

それに、レトロなデザインの街灯が等間隔とうかんかくに立っていて、道を照らしてくれている。

うふふっ！ ロマンチックな雰囲気ですねえ。

そして辿り着いた見晴らし台の木製ベンチに座って、私達は一緒に星空を見上げた。

(本当に……綺麗……)

「……あれが、夏の大三角です」

正宗さんの指が、三つの星をなぞる。

夏の大三角……！ 私にも聞き覚えのある星座だ。

思っていたより、大きな三角形になるんだなあ……

「あれが、織姫星おりひめぼし。こと座のベガです」

「織姫……」

七夕の、織姫と彦星。
たなばた ひこしほ

織姫がいるなら、彦星はどこにいるんだろう？ って思っていたら、「彦星はあそこですよ」と正宗さんが指差す。

言葉にしなくても思ったことが伝わったようで、なんだかこそばゆい。

「彦星。わし座のアルタイル」

今日はそれほどはっきり見えないけれど、その二つの星の間を、天の川が流れてるんだって。

「そしてもう一つの星が、はくちよう座のデネブ」
 ベガにアルタイル。そしてデネブ。

この三つの星を結んだのが夏の大三角だって、正宗さんは教えてくれた。

その他にも、「あの星は……」と説明を続ける。

なんだか意外だった。文系の正宗さんが、こんなに星座に詳しいなんて。

すごいなあ。私なんて、星の名前ひとつわからない。

正宗さんが指差す星を、私も一緒に見つめる。

今夜初めて知った、正宗さんのもう一つの顔。

穏やかな表情に、どこか楽しげな、少年のような笑みを浮かべて、星空を見上げる旦那様。

(どうしよう……)

……胸がきゅんきゅん……しちゃいます。

(正宗さん……)

「そしてあれが……」

正宗さんが新しい星を指差した時、さあつと、涼しい夜風が髪を撫でていった。

反射的に身体がぶるつと震えて、やっぱり高原の夜は寒いなあ……なんて、思っていたら……

「……寒い、ですか……？」

正宗さんに、ぎゅつと……肩を、だ、抱き寄せられました。

(ひ、ひゃあああ……！)

私はドキドキしながら正宗さんのあったかい身体に寄りかかる。

「……も、もう、寒くない……です」

正宗さんが、抱き締めてくれるから……

「……よかった……」

し、しかしですね……！

イケメンに肩を抱かれて星空を見上げるとか……！！

私、どこの乙女ゲーヒロインよ！！ ってツツコミつつ、でも……

もう少しだけでいいから、このままでいたって思いました。そして私達は再び夜空を見上げ、ただ静かに寄り添って、空に輝く星々を見つめ続けた。

立ち読みサンプルはここまで

初めてのお盆

水族館デートに高原でのバーベキューと、イベント盛りだくさんだった今年の夏。その中でも特に忘れられない、忘れちゃいけない思い出がある。それは、二人で初めて迎えたお盆のこと……

八月十三日、お盆は亡くなった人の魂が家に帰ってくる日だ。私と正宗さんは朝方のまだ涼しいうちに、柏木家の墓地を訪れた。

お盆ということもあって、他にも多くの人がお墓参りに来ている。みんな、家族の魂を迎えに来たんだろう。

正宗さんのお祖父さん、お祖母さん。そしてご両親が眠る柏木家のお墓。私達は玉石の隙間に生えた雑草を抜き、墓石に水をかけて清める。

黒の御影石が水に濡れて、わずかに色を変えるのを、私は神秘的な面持ちで見つめていた。

お墓を前にすると、心が静かになる。